

プラトンの宇宙の時間性と空間性(一)

矢 内 光 一

一
プラトンの後期作品の一つ『ティマイオス』については、古来それを宇宙生成論的な方向で解釈すべきか、それとも宇宙生成論と対比的な意味における宇宙論として解釈すべきかをめぐって議論がなされてきた。しかし、いずれの解釈をとるにしても、ひとまず『ティマイオス』の叙述全体のなかに、宇宙生成論的要素と宇宙論的要素とがいかなる形で存在するのかを検討すべきであろう。宇宙生成論的要素はとくに時間性に關係する。また、宇宙論的要素はとくに空間性に關係する。本稿では、『ティマイオス』の叙述全体のなかで、宇宙が時間性と空間性に關係していかなる性格をプラトンによって——意識的にであれ無意識的にであれ——負わされているかを検討したい。そしてその検討は、『ティマイオス』がこの宇宙の「はじめ」を問ひそれに答えることによって成立している以上、その「はじめ」の意味の検討をめざす形で方向が与えられなければならないであろう。

二

一般に、プラトンの宇宙観の根本的特徴の一つに目的論的性格があげられる。事実、イデア世界を範型(モデル)として、それに類似したものを作りあげようとする善なる製作神デミウルゴスによるこの宇宙の創造の模様が叙述される『ティマイオス』に、目的論的性格を認めない

わけにはいかない。しかし、プラトンの宇宙観が目的論的であると言うときに注意しなければならないのは、その目的論が、ある目的ないし意図が未来において実現される、あるいは実現されていくという形態をとったものではないということである。『ティマイオス』で展開される宇宙に関する目的論をそのような未来との関連で目的が据えられた目的論として理解するとすれば、そのある重要な側面を見失ってしまうであろう。プラトンの宇宙にあつては、逆に、目的は過去との関連において基本的に設定されていると言わなければならない。さらに言えば、目的は宇宙の最初の過去、原過去とも言うべき、宇宙が宇宙として成立した原初においてすでに実現されてしまっていると考えなければならない。このことは、『ティマイオス』の製作論的枠組から直接的に帰結する。

『ティマイオス』の製作論は四つの要素から成立する。すなわち、製作行為者としてのデミウルゴス、製作のモデルとなるイデア世界、製作をおこなうにあたって必要な素材、製作の所産としての作品の四つがその要素である。⁽²⁾宇宙の製作は、製作神デミウルゴスが、デミウルゴスとは独立に予め、存在する素材から、イデア世界をモデルとして、それにできる限り類似した作品を作るといふ枠組のなかで論じられ、宇宙はそのような製作の産物として語られる。そしてこのような製作論の枠組において、注目されなければならないのは、モデルに可能な限り類似した作品を作ろうとするデミウルゴスの意志である。⁽³⁾デミウルゴスの本質的な規定は、それが善なる者であり、善なる者である以上、嫉妬^{ブトノス}がないというところに与えられる。⁽⁴⁾通常、嫉妬は、もてざるもの・劣ったものの、もてるもの・優れたものに対する嫉妬を意味すると考えられるが、ここで言われる嫉妬は、逆に、もてるもののもてざるものに対する嫉妬、言い換えれば、欠如せる存在に対する欠如なき存在の出し惜しみ、を意味する。善なるデミウルゴスは、いかなる出し惜しみをも排して、劣ったものを可能な限り優れたものになそうとする、善意志をもつ。この善意志は製作論の枠組のなかで、作品をモデルであるイデア世界に最大限に似せて作ろうとする意志としてはたらく。この宇宙は、デミウルゴスの善意志から、イデア世界に可能な限り類似するものとして作られた、最善最美な作品である⁽⁵⁾ということになるわけである。

けれども、デミウルゴスの善意志も宇宙の最善最善性も、「可能な限り⁽⁶⁾」という一定の制約を受けたものであることに注意しなければならない。デミウルゴスの善意志は、絶対的な善美なものではなく、また宇宙は、可能な限りイデア世界に似せられたのであって、端的絶対的な善美を実現しているのではない。絶対的な善美は専らイデア世界について言われえ、生成世界に属するこの宇宙には、最上級としての比較的相対的な最善最美が言われうるのみである。善意志をもつデミウルゴスもこの宇宙をイデア世界そのものに等しくすることはできない。デミウルゴス

の製作は、あくまで、イデア世界への可能な限りでの類似化をおこなうところにとどまる。宇宙の最善最善性がそのような消極的な意味を含んでいること、またデミウルゴスが全能的存在でないことは、『ティマイオス』全体を通じて終始一貫して主張されるところである。

そのように、宇宙の最善最善性、デミウルゴスの善意志には、消極的意味が含まれており、その消極性を無視することは許されないが、しかし、消極性のみを強調してはならないであろう。むしろ、最善最善性、善意志は、消極的意味と同時に積極的意味をもそなえた二義的な概念である。宇宙は、イデア世界との対比において消極的であるが、しかし、専ら生成消滅の相においてのみとえられた生成世界そのものの⁽⁸⁾ような存在として考えられてはならない。たしかに、宇宙と生成世界そのものは、空間的な拡がりにおいて事実上一致するとみななければならないが、宇宙が神的な善意志をもって作られた所産であるとされるとき、宇宙の秩序・調和の相が主張されているのであって、宇宙のイデア世界に対する対比ではなくそれとの類比が、積極的に主張されているのである。

宇宙は、イデア世界ではなく生成世界の側に属するものとして、その存在性に関して、生成・運動をおこなうという本来的な制約を受けているが、しかし、その具体的なあり方に関して言えば、それに許容される限りでのあらゆる可能性のなかで、デミウルゴスの神の善意志のゆえに、それより他ではありえない、最善最善なあり方をとっていると考えられているのである。宇宙の最善最善性は、端的絶対的な善美性と端的絶対的な不善不美性ないし善美のまったき欠如との両極の間で、許される限り、端的絶対的な善美性に接近したところに位置づけを与えられていると言つてよいであろう。その位置は、それより他ではありえない、一つの限界的な位置として考えられなければならない。

しかし、そのような宇宙の最善最善な一つの限界的な位置づけを与えたデミウルゴスの善意志は、漸次発現するものではない。また、宇宙の最善最善なあり方は、次第に実現するものではない。出し惜しみせぬデミウルゴスの善意志は、創造のさいに、その一切が全面的に展開されているのであり、宇宙は、創造されたさいに、最善最善な限界的なあり方に到達しているのである。もちろん、デミウルゴスの製作は一連の過程として叙述され、宇宙の最善最善性もその製作過程に依じて実現されていたように語られてはいる。しかし、その叙述を文字通り取るにしても、その過程は宇宙が実現するにいたるまでのことであって、プラトンにとって宇宙が宇宙と言えるのは、その過程を経てそれより他ではありえない最善最善なあり方に到達してからのことである。『ティマイオス』の叙述方式にしたがうとしても、宇宙は原初においてすでに完成されていると言わなければならない。その意味で、『ティマイオス』の目的論は、目的が原初において実現されてしまっている目的論である。しか

も、デミウルゴスの手によつて直接創造されたものは、その永続的存続が保証され、それによつて、宇宙は原初の完成された最善最善なあり方を永続的に保持しつづけることになる。嫉妬なきデミウルゴスは、最善最善なものとして完成した宇宙から、そのいかなる善美な要素も奪い去ることがない。さらに、宇宙は原初において一つの限界的なあり方にまで到達しているものであるから、その限界をこえて、さらに一層善美なあり方をとることもできない。神的善意志は、原初において宇宙を事実上唯一のあり方にまでもたらしめているのである。かくして、宇宙は、原初において完成され、原初以降その完成された最善最善なあり方を同一的に保持しつづけるものとして把握されていると言わなければならない。宇宙は完成態にあるものとして述べられているのである。⁽¹⁰⁾

完成態にある宇宙という観念は、そのようにして製作論的枠組から直接帰結する。そして完成態にある宇宙の具体的内容は、『ティマイオス』のなかで様々な面にわたつて述べられるのであるが、しかし、ここで一つの問題が生じる。それは、完成態にある宇宙にあって、時間というものがあるのかの積極的な意義を有しているのだろうか、という問題である。⁽¹¹⁾ もちろん、完成は静止を意味せず、プラトンの宇宙においても種々のレヴェルで個々の運動が存在する。天体は位置変化をおこない、物質も様々な運動をなす。また動物もそれぞれ固有の活動をおこなう。しかし、それらの一切を考慮しても、宇宙は原初において完成し、原初以来本質的に同一的なあり方を保ちつづけていると考えられると言わなければならないであろう。完成態としての宇宙という考え方は、進化論的思想と鋭く対立する。⁽¹²⁾ 宇宙は、進化、発展するものとしてではなく、むしろ、過去・現在・未来にわたつて同一的な事態を反復するものとして主張されている。かりに、現在のわれわれが、原初の宇宙にまで遡りえたとしても、その宇宙は、現在のそれと本質に何ら変わるところがないであろう。逆に、われわれは別に原初にまで遡るまでもなく、原初宇宙を現在においてまのあたりにしているときさえ言うであろう。このようにとらえられた宇宙は、ある意味で、時間を超越してしまった宇宙であるとも考えられる。だとすれば、時間が実質的に意義あるものとして考えられていないのではないか。『ティマイオス』において、宇宙が原初に完成されたということは、その叙述のきわめて重要な部分を占める。しかし完成態にあるものとしての宇宙にあっては、全体としても、各部分においても、その本質的なあり方が一定の規定を受けている。宇宙はある意味で永遠の相でみられているのである。これはたんに天体のレヴェルに限られることではない。宇宙のあらゆるレヴェルにわたつてその本質的なあり方が原初において規定されているのである。

かくして、原初において完成された宇宙では、ある意味で、時間が実質的に無化されてしまい、実質的な意義をもたされていないとも考えら

れる。しかし、プラトンの立場からすれば、時間になったく逆の意義が与えられているのではあるまいか。

注

- (1) Cl. BURY, R.G., *Plato—Timaeus etc.* (Loeb Cl. Library), London, 1929, p.5; MORROW, G.R., 'Necessity and Persuasion in Plato's *Timaeus*', in *Studies in Plato's Metaphysics*, ed. by R.E. ALLEN, London, 1965, p.421. また、いわゆる「無秩序な運動」を「必然」と区別するところを主張し、「無秩序な運動」を目的論的に解釈しようとするタレンツは、『ティマイオス』を目的論者のバニフリストである」と述べる (CLEGG, J.S., 'Plato's Vision of Chaos', CQ, N.S., XXV, 1976, p.54).
- (2) 製作者「モナル」作品としての最も重要な叙述は、*Timaeus*, 28a6-29b2 に与えられる。また素材については、*Tim.*, 30a2-6と69c1-2を特記する。
- (3) *Tim.*, 29e3, ἐφορήθη, 30a2, βουλήσεις.
- (4) *Tim.*, 29e1, ἀναβὼς γὰρ ἀναβὼς δὲ οὐδείς περὶ οὐδένος οὐδέποτε ἐτήρηται φθόνος. テイマルコスに嫉妬がないという観念と、伝統的な「神々の嫉妬」との関連については VLASTOS, G., *Plato's Universe*, Seattle, pp.27f. を参照。
- (5) *Tim.*, 30b5-6, ὅτι κἀλλιστον εἶναι κατὰ φύσιν ἄριστον τε ἔργον ἀνεργητέον, 又 29a5, ὁ κἀλλιστος τῶν γεωμετρῶν. 宇宙が最善最良であるということとしてそれが神的理性的なものの所産であるということは、『ティマイオス』全体の前提であるとともに、それを一定の仕方で証することが『ティマイオス』におけるプラトンの目的である。また、92c5-fm. をみよ。 Cf. CORNFORD, F.M., *Plato's Cosmology*, London, 1937, p.38.
- (6) *Tim.*, 29e3, ὅτι γὰρ κατὰ, 30a3, κατὰ βούλησιν, et passim.
- (7) デミウルゴスはキリスト教的全能神ではない。少なくとも、素材そのものをつくりだすことはできず、それを幾何学的数学的に秩序立てるにとどまる。また、デミウルゴスは「理性」に対応すると考えられるが、「理性」も「必然」を「説得」するにとどまる (*Tim.*, 47e5-48a5).
- (8) 空間を論じる箇所では (*Tim.*, 48e2-52d1) 描かれる生成世界を特に参照せよ。
- (9) *Tim.*, 41a8-b6.
- (10) プラトンの宇宙は原初以降は実質的に一つの自立した世界になっていると言えよう。もちろん、宇宙はデミウルゴスの作品なのであるが、しかし、作られてしまったあとは、デミウルゴスは宇宙に対して実質的に新たな介入をなさない。したがって、宇宙は自己完結的な独立的世界であると言いうる。けれども、デミウルゴスを度外視して宇宙を考えてよいかと言えば、むしろ、宇宙はあくまで神的理性的な存在の作品であり、それに自己の存在を負うているところから、『ティマイオス』におけるプラトンの主張をみるべきであろう。

(11) このような形で問題提起・批判は、ベルクソンが『創造的進化』(BERGSON, H., *L'Évolution Créatrice* (P.U.F.), Paris, 1964¹⁴⁵) のなかでおこなっている。ベルクソンは、目的論と機械論のいずれもが、實在について「類似または反復の相」(‘l’aspect similitude ou répétition’, p.45, Cf. p.29) だけしかみないとし、「時間を無化」(‘faire table rase du temps’, p.46) してしまっているとして批判する。ベルクソンは目的論、機械論を類型化して批判しているのであるが、ベルクソンの批判はプラトンに鋭く関わっている。もちろん、プラトンとベルクソンでは、時間の意味が異なるが、ベルクソンはプラトンの時間概念を本質的な点で洞察していると「わなければならないであろう」(Cf. pp.49 et 317)。¹⁴⁶ また、プラトンからプロティノスにいたるギリシア哲学の展開についての鋭い批判も同書にみられる (p.323)。

ただし、ベルクソンは目的論を類型化してとらえそれを未来との関連で目的を据えるものとしているが (pp.30f.)、プラトンの目的論では、目的は過去との関連で設定されている。プラトンにとっては過去、しかも原過去とも言うべき原初に、本源性、第一次性が置かれ、現在および未来は派生的、二次的であると言えよう。『ティマイオス』の叙述方式は、原初との関連で一切を意味づけようとするものである。

またアリストテレスとベルクソンの関わりについて、岩田靖夫「アリストテレスの目的論」(『東北大学文学部研究年報』、一九七六年、二五—二六頁) に興味深い考察がある。

(12) 進化論的思想に対する批判はプラトンにおいては、自然と技術の関係の問題とからんでなされるが(特に『法律』第十巻)、『ティマイオス』も基本的には自然と技術の問題に対するプラトンの解答とみるべきである。宇宙生成以前のカオスの世界は、技術の介在しない自然的世界であると考えられる。そしてその世界は一種の物質進化論的にみられた世界であると言えるであろう。プラトンはそのような進化論的思想に対して、『ティマイオス』をもって対決しているのであって、カオスの世界の『ティマイオス』全体のなかでの位置づけもそのような線に沿って考えられなければならないであろう。神的技术、神的制作活動については *Sophistes*, 265b6f., 265c1-e6, 265e3, 266b1-5 を参照。さらに *Phaedo*, 97c1-99d2, *Philbus*, 28d5-e6 を参照。

三

プラトンの時間規定は有名な「永遠の、動く似像」という形であたえられるが、時間はデミウルゴスによって作られた作品の一つであるということにまず注目しなければならない。空間がデミウルゴスの作品ではなく、むしろその製作行為の与件の一つとなっているのに対して、時間は、デミウルゴスがこの宇宙を可能な限りイデア世界に似せようとする営みのなかで製作したものである。

「これ(宇宙)を生んだ父(デミウルゴス)は、それが運動をおこなって生きており、永遠なる神々(諸天体)の聖所となっているのを見

で、喜んだ。そして大いに氣をよくして、さらに一層範型パラダイグマによく似たものに作り上げようと考えた。そこで、その範型が永遠なる生物であるのとちょうど同様に、この世界もまたできる限りそのようなものに仕上げようと試みた。さて、かの生物の本性は永遠なものであったが、そうしたあり方を生みだされたものに対しても完全に付与することは不可能であった。そこで、それにかえて、永遠の、いわば動く似像モビイル・イメージを作ろうと思ひ、そして天を秩序クォーラ・ラ・メづけると同時に、一のうちに留まる永遠の、数にもとづいて進行する永遠的な似像を作った。この似像こそ、われわれが『時間』と呼んでいるものに他ならない。⁽¹⁾

ここで述べられていることは、主として、永遠と時間との対比と類比である。永遠の一性、静止性、時間の多性、運動性において両者は対比し、また、イデア世界については専ら永遠が言われえ、この宇宙については専ら時間が言われうる。ここで永遠は、永遠の意味においてではなく、超時間的な意味において主張されている。永遠の存在については「あったし、あるし、あるだろう」という表現方式を用いるべきでなく、ただ、「ある」と言うべきである。⁽²⁾「過去にも」あったし、（現在も）あるし、（未来においても）あるだろう」という過・現・未的表現方式は、時間の永続について適用されるべきであって、永遠については、超時間的現在をあらわす端的な「ある」（文法範疇としては無時間的現在）が用いられるべきである。時間との対比を明確にしようとすれば、永遠には、むしろ「なかったし、ないし、ないだろう。ただ、ある、のだから」といった表現方式が適用されるとも考えられるであろう。⁽³⁾そのように、一方で、時間と永遠との相違が主張されるとともに、他方では、兩者の一種の類似的な関係も主張される。時間は、この宇宙が永遠なるイデア世界に「さらに一層」⁽⁴⁾似るべく、デミウルゴスによってつくられた、永遠の似像である。時間は、あくまで永遠そのものではないが、永遠の写しであることにおいて、永遠との類似性が主張されているのである。しかし、時間は永遠の似像であるという規定は、そのように永遠と時間の関係を一定の仕方ですすものではあるが、時間そのものをプラントが具体的にどのように把握しているかは、それだけでは十分明らかにならない。

時間は、⁽⁵⁾「天を秩序づけると同時に」デミウルゴスによって作られたものであり、また「時間が天と共に生成した」⁽⁶⁾のは、「時間と天が同時に生まれたものである以上、⁽⁷⁾もしもそれらの分解というような事態が発生するとすれば、分解もまた同時になされるためである」とされる。実際には天は分解されないことが保証されているが、⁽⁸⁾ここで重要なのは、時間が宇宙とともに生じた存在であって、宇宙以前には存在しなかったということ、⁽⁹⁾時間は宇宙とりわけ天と不可分な存在であるということである。『ディマイオス』では宇宙と対比的に、宇宙が生じる以前の生

成世界の狀態が語られるが、そこには、プラトンによれば、時間は存在しないのである。もちろん、そこにも生成変化がみられ一種の運動がこなわれているのであるが、その運動は、「調子はずれの無秩序な運動⁽¹⁰⁾」である。時間は、端的な生成変化の相においてのみみられた生成世界そのものに属するのではなく、秩序づけられた生成世界である宇宙において、一定の秩序的存在として、存在する。生成世界は生成変化をおこなうという本来的な規定を受けており、そのために時間はあくまで「動く」似像という規定を与えられなければならないが、しかし時間は、無秩序的生成変化ではなく秩序的生成変化と関連づけられて把握されているのである。時間はたんなる生成変化、あるいは生成変化そのものとも言うべきものとの関連でその存在が主張されているのではなく、生成変化そのものとイデア世界の静止・不動との中間的な存在性のレヴェルが考慮されてその存在が主張されていると言わなければならないであろう。時間が永遠の似像であるということによって、一面で生成世界そのものの、またイデア世界そのものにおける時間の存在が否定されるときにも、他面で、イデア世界の似像である一定の秩序をもった生成世界としての宇宙においてその存在が主張されているのである。その意味で、時間は、無秩序な運動がみられる生成世界そのものにおいて考えられうるようなたんなる持続とは異なり、生成世界そのものよりは比較的イデア世界的な、イデア世界の似像としての宇宙において存在する、より永遠的な存在であると言いうるであろう。

プラトンの時間は、そのように、ある種の秩序的な存在であるが、それは必ずしもたんに前―後性との関連で主張されているのではないと考えるべきであろう。宇宙生成以前の無秩序な運動がおこなわれる生成世界においても、一種の不可逆的な生成的事態がみられる。⁽¹²⁾ 無秩序な運動がおこなわれる生成世界と言っても、一定の方向性をもった生成・運動がおこなわれているのである。そこには、明確な形ではないにしても、ある程度の前―後性が認められなければならないであろう。しかし、プラトンはそのような世界に時間が存在するとは主張しない。時間が秩序的な存在であると言うとき、そこで考えられる秩序性はたんに前―後性ということからのみとらえられた秩序性を意味するのではないと言いうべきであろう。

その秩序性は、むしろ、数および天体の運行との関連において基本的に把握されなければならない。時間は「天と共に生成した」「数にもとづいて進行する」⁽¹³⁾ 存在である。イデア世界が不動であり、永遠が「一のうちに留まる」⁽¹⁴⁾ のに対して、宇宙は運動、変化をおこない、また時間は動的であって「一のうちに留ま」らない。しかし、そのようなイデア世界、永遠の静止・一性と宇宙、時間の運動・多性の対比とともに、宇宙

の運動、変化が一定の秩序ある仕方になされることにより、宇宙がイデア世界に似た似像たりうるということがプラトンによって主張されているのである。そしてその秩序ある仕方とは、具体的には、「数にもとづく」ということを意味する。生成世界はその本来的な規定からして多的世界であるが無秩序な運動のおこなわれる生成世界は言わば不定的多的世界である。秩序的な数を介することにより、不定的多的世界から、秩序ある多的世界へと移行し、また端的な動的世界から、秩序ある数にもとづいた運動のおこなわれる世界へと移行し、そのことにより、一的静的なイデア世界に似た似像たりうる。そして、数は一種の理性的秩序的存在であり、時間が永遠の似像たりうるのも、そのような数的秩序性による。時間は、その意味で、この宇宙を「さらに一層」イデア世界に似せるために、この宇宙の運動、変化を数的に秩序あらしめるべく、デミウルゴスによって作られたものであると言わなければならない。

ところで、時間は天体、特に太陽、月および五惑星の七天体の運行と不可分なものとして考えられている。七天体は「共同して時間を作り上げなければならないもの」⁽¹⁵⁾として、デミウルゴスによって作られる。七天体は何よりもまず時間を生むために、作られるのである。七天体は、時間をつくりだす、「時間の道具」⁽¹⁶⁾である。七天体は、七つに分割された、宇宙靈魂の「異」の円のそれぞれに据えてつくられる。各円はいずれも一様な円運動をおこなない、天体各々は、円によってはこばれ、一様な円運動をおこなうことになる。つまり、七天体は、一方で相互に異なっていた、他方でそれ自体としては一様な、円運動をおこなう。そしてそのような七天体の運行により、数ももたらされる。時間は「数にしたがって循環する」⁽¹⁷⁾存在であるが、その数ははじめから与えられているのではなく、七天体の運行によってもたらされると考えるべきであろう。七天体は運行によって数をつくり出すという仕方で時間をうみだすのである。『ティマイオス』の叙述によれば、天体そのものおよび時間の説明に先立って、すでに、「同」の円と「異」の円という宇宙靈魂についての説明がなされていた。「同」の円と「異」の円は前者が恒星、後者が七天体をはこぶ靈魂の環であるが、デミウルゴスは、「同」の円と「異」の円をつくったあとで、宇宙を「さらに一層」イデア世界に類似させるべく、円運動をおこなうそれら不可視的な靈魂の環に可視的な諸天体を据えることにより、時間をつくるのである。七天体は「時間の数の区分と維持のため」⁽¹⁸⁾につくられるのであるが、七天体それぞれが一定の円運動をおこなない、そのことによって、七つの回転速度の相互に対する相違とその各々の一様性から、数が「区分」され「維持」されたものとしてうみだされるというのが、プラトンの言わんとするところであろう。そして数をつくりだすと言っても、七天体の運行そのものが数的な循環なのであって数をつくりだしていることなのである。時間が「数にした

がって循環する」存在であるといわれるとき、時間は七天体の運行そのものとして考えられていると言つてよいであらう。⁽¹⁹⁾ もちろん、七天体ばかりでなく恒星も時間をつくるのに寄与するが、⁽²⁰⁾ 数に関して言えば「異」の円がそれ自体のうちに多性と一様性をそなえており、そのため、時間をつくるということでは、七天体のほうが、特に言われなければならないと考えられるであらう。しかし恒星の運行も周期的な運行である。七天体のそれとあわせて八種の運行がうみだされる。そしてそれら八つの運行はそれぞれが時間であるとともにまた全体としても時間をつくりだす。すなわち、八種 of 天体が宇宙の原初におけるのとまったく同じ位置を占めるとき、またその度毎に時間は完成される。⁽²¹⁾ プラトンはそこで、部分からなる全体としての時間を考えている。時間には、全体時間と部分時間があり、七天体および恒星の運行は各々が一つの時間であるが、全体としての時間は、各天体の回転周期の最小公倍数(完全年、^{ホレオス・メテオロス}と云われる)をもつて完結するものとして循環的に把握されているのである。さて、このようにとらえられた時間は、原初において宇宙が完成されたとする製作論的目的論に十分に適合する性格をもつものであると考えられるであらう。時間は、デミウルゴスによって数的理性的な秩序を与えられた原初における宇宙の完成されたあり方を最も典型的に示すものである。イデア世界に似せられたものであるという限りでの宇宙の運動として特に言われるべき、宇宙の最も根本的な運動は「同」の円、「異」の円という宇宙靈魂の運動であり、その円によって運ばれる天体の運行である。デミウルゴスは、宇宙をできるだけイデア世界に似せた永遠的なものたらしめるために、天体をつくり、そのことによって、永遠の動く似像としての時間をつくった。時間は、「同」の円、「異」の円という宇宙靈魂の理性的運動の数的表現とも考えられるであらう。時間はまた循環的な完結体であるということを特にその理由として、一的静止的な永遠の似像たりうるとも言えるであらう。しかしさらに、その循環的完結性のゆえに、宇宙は時間的に閉じたものになっていると考えられる。プラトンの宇宙は、日(昼、夜)、年(四季の一巡)といった部分的な時間的完結が複雑に組みあわさって構成される完全年という全体時間において完結すると考えられていると言えるであらう。完全年を全体時間とした宇宙は時間的に円環的に閉じているのである。⁽²²⁾ そしてプラトンの主張する宇宙は、デミウルゴスの創造したままの秩序をできるだけ維持し、完成態を完成態たらしめつつけることのできる宇宙でなければならないであらう。プラトンの宇宙に要求されるのは、原初の秩序をそのままに保持することであつて、本質的に新たな事態が生起することではない。したがって、宇宙に本質的に新たな事態が生起しないというところに時間的意義がみいだされるであらう。宇宙がより同一的なものであればあるほど、時間的により積極的な意義があることになるであらう。時間は永遠の似像としてつくられたが、宇宙が永遠的な相を呈するも

- (13) *Tim.*, 37d6-7, 'κατ' ἀρχὴν ἰούσαν'.
- (14) *Tim.*, 37d6, 'μένοντος αἰῶνος ἐν ἐνέ'.
- (15) *Tim.*, 38e4-5, 'ὅσα εἶδει συνεπείχεσθαι χρόνον'. Cf. *ibid.*, 39d7-e2.
- (16) *Tim.*, 41e5, 'ἔργατα χρόνων', et 42d5, 'ἔργατα χρόνων'.
- (17) *Tim.*, 38a7-8, 'χρόνου... καὶ κατ' ἀρχὴν κινουμένου'.
- (18) *Tim.*, 38c6, 'εἰς διορισμὸν καὶ φάτατην ἀριθμὸν χρόνον'.
- (19) Cf. *Tim.*, 39d1, 'χρόνον ὅσα τὰς τούτων πάνας'. 参す THEOPHRASTUS, *Physicæ Opiniones*, fr. 15 (DIELS, H., *Doxographi Graeci*, ed. *iterata*, Berlin/Leipzig, 1929, p.492), 'Ἰδοῦμαι οὐ καὶ τὸ τί εἶεν, εἴτερον δὲ μὲν τὴν τοῦ ὅλου κίνησιν καὶ περιφοράν τὸν χρόνον εἶναι φάται, ὡς τὸν Πλάτωνα νομίζουσιν ὃ τε Εὐδόκιμος καὶ ὁ Θεόφραστος καὶ ὁ Ἀλέξανδρος', 参す PLATON, *Defin.*, 411b3, 'Χρόνος ἡλίου κινήσεως, μέτρον φάτας' 参す PLATON, *Tim.*, 39d2-e7.
- (20) Cf. *Tim.*, 39b7-e2.
- (21) *Tim.*, 39d2-e7.
- (22) Cf. CORNFORD, F.M., *Plato's Cosmology*, pp. 103ff.

四

プラトンは、宇宙以前、時間以前の世界をまず 範型—空間—似像という三項からなる枠組でとらえる。しかし、ここでいわれる範型、似像は製作論的な枠組における範型、似像ではない。製作神デミウルゴスが製作をおこなう以前、以前の世界が問題にされているのである。そのため、似像は作品としての似像ではなく、範型の空間への非製作論的な写像という意味をもつ。空間には、その拡がり全体にわたって範型の似像が充滿している。範型そのものは空間内に存在せず、その似像が空間内に、いわば写しだされるのである。これら範型、空間、似像の三者が宇宙以

前に存在していたものである。空間は似像が現出し消失する場であり、一切の似像を受け容れる「乳母」のような存在であって、あらゆる種類の似像を受容すべく、いかなる特定の似像の性格をもたない。空間はそのように完全に無性格的な受動的な存在であることにより、似像が似像として存在することを可能にし、生成世界が生成世界としての存在性を有することを可能にする。空間が存在しなければ、イデア世界だけが存在し、似像は写しだされる場をもたず、結局無に帰してしまふことになる。似像は、プラトンにとっては本来イデア世界についてのみ言われるべき「存在」ではないが、しかし、「無」でもなく、似像なりの生成的存在性を有するものである。似像は、空間に写しだされることにより、それ独自の固有な存在性を得るのである。空間は、完全に受動的な存在であるが、しかし一種の積極的な存在である。それは、例えば、不可分な実在がそこに存在し、そこで運動し、それによって他の不可分な実在から隔てられるといった、原子論的な立場からみられた空間―空虚、間隙、無ではない。それはむしろ、鏡のような存在である。

似像は空間に現われては消えてゆく。空間のある部分が火化されればそこは火的な状態となり、また水化されれば水的な状態となる。空間自体がいかなる固有の性格をもたぬがゆえに、いかなる性格をも受け容れ、火的にも水的にも、いかなる状態にもなりうる。そして写しだされる似像には、それ自体いかなる実体性もたされない。現出して消失するのであって、ある似像が何らかの変形、変化によって他の似像になるのではない。似像は形をかえて存続する何らかの実体性を有するのではなく、端的に現出し、端的に消失してしまうのである。そこにかがわれるのは、文字通り、生成消滅であって、その生成消滅にはいかなる形においても保存則に該当するようなものは認められないであろう。空間の全体にわたって、いわば無から似像の有への、似像の有から無への生成消滅がみられる。

ここにみられる世界は、⁽¹⁾プラトンの主張するカオスの世界、イデア論的にみられたカオスの世界である。プラトンは、カオスの世界をも、範型―空間―似像論というイデア論的な枠組をもって把握し、規定する。しかし、このカオス的な状態はそれ独自ではコスモ的な状態に移行しえない。その移行は、範型、空間、似像にくわうるにデミウルゴスが必要とし、デミウルゴスの創造によるはかばかしいのであるが、けれどもプラトンは、範型―空間―似像論的にみられたカオス的な世界を基礎におき、その次の段階として、宇宙生成論的^{コスモゴニア}と言うべき視点からみられた世界を描いてみせる。

注

(1) この世界についての詳論は拙稿「プラトン自然哲学の根底」(東京教育大学文学部紀要『哲学倫理学研究』一〇五、一九七六年、一一二頁)を参照されたい。

(未完)